

平成 30 年 6 月 7 日現在

機関番号：33906

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04522

研究課題名(和文)ドキュメンテーションの手法を用いた生徒会活動と学校の活性化に関する研究

研究課題名(英文) Student Council Activity and School Invigoration: Employing Documentation
Inspired by Reggio Emilia approach

研究代表者

山田 真紀 (YAMADA, MAKI)

椋山女学園大学・教育学部・教授

研究者番号：30329643

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、ドキュメンテーションの手法を用いて生徒会活動の活性化を促すというものである。第一に、生徒会活動に関する先行研究の整理であり、日本の生徒会活動が市民性の教育の拠点となりうる視点が乏しいことを明らかにした。第二に、滋賀県公立A中学校において、生徒会活動に関するショートスパンのパネル型質問紙調査を行ない、諸外国の生徒会活動がリーダー養成に重点を置くのに対し、日本の生徒会活動はフォロワーの生徒の育ちも大切にするという特徴を明らかにした。第三に、同中学校において、生徒会活動に関する質的調査(参与観察)を行い、ドキュメンテーションの手法の効果と限界を、その理由とともに明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This research employs “documentation” to help promote the activities of a student council in a Japanese junior high school. Firstly, I did an overview of previous research, which revealed a lack of awareness amongst Japanese people on the important role student councils can play in civic education. Secondly, through conducting follow-up questionnaire interviews over a one-year period in P Junior High School in Shiga Prefecture, Japan, it was revealed that the education and development of “follower students” (those not in the council) was considered an important aspect of the student council’s role. This was in contrast to research findings in some other countries that found the focus of students’ personal development was mainly on council members (“leaders”). Thirdly, the research reports on the results of participant observation in P Junior High School, and discusses some of the limitations of “documentation” approach.

研究分野：特別活動

キーワード：特別活動 生徒会活動 ドキュメンテーション

1. 研究開始当初の背景

特別活動の一領域である「生徒会活動」は歴史ある活動領域であるものの、残念ながら、活発に活動が展開されているとはいえない状況にある。日本特別活動学会・研究開発委員会が平成 22 年度に実施した調査（特別活動の社会性獲得に関する調査）によると、「児童会・生徒会の役員に立候補するものがない」「生徒総会は形式的で子どもの活発な意見や議論がない」「児童会・生徒会活動を通して、学校生活の主人公は生徒自身であるという意識を伝えていきたいが、それがなかなか難しい」などの課題が示されている。

2. 研究の目的

日本の生徒会活動をいかに活性化するか。民主主義の教育や、市民性・社会性の育成につながるような活動にするためにはどうしたらよいかを明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は研究協力校である滋賀県の公立 A 中学校を対象とした事例研究である。研究に用いた方法は質問紙調査法と参与観察法である。質問紙調査では、年度初めと年度終わりに 2 回の質問紙調査を行い、1 年間の活動を通して生徒の意識や取り組みがどのように変化したのかを把握するショートスパンのパネル調査を行った。第 1 回の調査を平成 27 年 5 月に、第 2 回の調査を平成 28 年の 1 月末に実施した。参与観察は、研究年度を通じて定期的に行い、生徒会活動にドキュメンテーションの手法を導入することで活動を活性化できるかどうかを検証した。

※ドキュメンテーション：優れた保育手法として注目されているレッジョ・エミリア・アプローチで大切な機能を果たしているもの。子ども達が取り組んだ活動について、他の保育者や保護者に解説するために作られる「絵や写真入りの説明文書（＝ドキュメンテーション）」を意味する。他者には見えにくい「活動に込められた意味」を言語化することにより、関係する人々に理解を促し、協力する人の輪を広げていくことができる。

※研究の仮説：生徒会活動は「一部の生徒だけがやっている」「生徒会担当の教員だけが頑張っている」という状況に置かれがちである。ドキュメンテーションを通して、生徒会がねらいとしていること、そこに込められた生徒会役員や担当教員の思いや願いを他の構成員に開き、みなが生徒会に関心をもち、協力しようとする構えを形成することで、生徒会活動を活性化することができるのではないか？

4. 研究成果

(1) 生徒会活動の先行研究の整理

日本国内で出版された生徒会活動に関す

る研究をすべて収集し、内容を類型化した。その結果、生徒会活動には、①生徒による自治的活動を通して、生徒自らがよりよい学校生活を創造するという学校文化を創ることができる、②生徒会活動に積極的に参画するなかで、生徒の自己肯定感・自己効力感を育むことができる、③生徒会活動を中心に、生徒・教職員・地域住民が連携を図り、よりよい学校と地域づくりに貢献できる。さらに、そのプロセスを通じて、④民主主義の基本について実践に学ぶとともに、資質としてのシティズンシップを育むことができる、など、多様な意味と機能があることが指摘されていることが分かった。

先行研究の多くは、生徒会活動を活性化するための方策を見出すことを目的とする実践研究であり、生徒会活動に対する生徒の意識や取り組み実態について、あるいは生徒の人間形成に及ぼす影響について、実証的に明らかにする研究はほとんどなかった。僅かに東京都高等学校特別活動研究協議会の生徒会活動研究部が平成 20 年度に実施した「高校生の生徒会に関する意識調査」があり、ここでは、高校生の多くは生徒会の必要性を感じながらも、その活動自体に対する関心は低く、生徒会活動の中心となる生徒会役員にとっては、フォロワーの生徒の無関心が活動の妨げとなっている現状を描きだしていた。

(2) 質問紙調査から得られた知見

質問紙調査から得られた知見は以下の 3 つに整理することができる。①生徒会活動への取り組み実態として、生徒会役員経験者はフォロワー生徒に比べて、相対的に生徒会活動に熱心に取り組んでおり、活動に従事するにつれて、生徒会活動が学校生活に果たす役割について理解を深め、生徒会は一部の生徒会役員のためのものではなく、全校生徒のためのものであるという実感をもつようになる。②民主的構えにおいて、生徒会役員経験者は学校やクラスへの所属感、社会への貢献意欲、および規範意識が相対的に高い。③自己イメージにおいて、生徒会役員経験者は自己肯定感が相対的に高く、活動に従事するにつれて、自己肯定感・自己有用感・自己効力感を高める可能性がある。

さらに、生徒会活動に積極的に取り組んだ生徒は、自己肯定感が高く、勉強を始めとする学校の諸活動にも意欲的であり、この傾向は、生徒会活動の中心メンバーだけでなく、フォロワーとなる生徒においても同様であった。この結果は、諸外国で行われている生徒会活動が生徒代表のリーダー養成に重きを置き、フォロワーの生徒の育ちをあまり意識していないのと対照的であり、日本の生徒会活動の重要な特徴のひとつだといえる。

※本調査に基づく研究は日本特別活動学会の研究紀要に査読付き学術論文として採択された。

(3) 参与観察法から得られた知見

資料1は実際にA中学校で行ったドキュメンテーションのサンプルである。ドキュメンテーションの実践を進めるなかで、生徒会活動の意図と、それに関与する生徒会役員・生徒会顧問教師の「思いや願い」を言語化することには一定の効果があった。しかしながら課題も多く見られた。ドキュメンテーションを生徒自ら行う時間的余裕がないこと、学校内で配布されるプリント物が多様・大量であることから、フォロワーの生徒や教職員全員に、じっくり文書を読んでもらうことが難しい環境にあったことなどである。

また調査において、ドキュメンテーションによる効果測定を実証的に行うしかけを開発することができなかつたのも今後の課題となった。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計2件)

- 1) 山田真紀 (2017) 生徒会活動の人間形成機能についての実証的研究—滋賀県の公立A中学校における質問紙調査を中心に—, 日本特別活動学会紀要, 25: 39-48.
- 2) 山田真紀 (2017) 特別活動の過去・現在・未来—これからの教育課程にどう位置づけていくべきか—, 椋山女学園大学研究論集 (社会科学篇), 48: 161-174.

[学会発表] (計3件)

- 1) 山田真紀 (2017) 特別活動の海外発信をどう考えるか: グローバルスタンダードな特活の創造. 日本特別活動学会創立25周年記念集会記念パネルディスカッション (パネリスト), 2017年1月28日, 東京農業大学, 東京.
- 2) 山田真紀 (2016) 生徒会活動の人間形成機能についての実証的研究 ~滋賀県の公立A中学校における質問紙調査を中心に~, 日本特別活動学会第25回大会, 25周年記念南関東大会 (自由研究の部), 東京学芸大学小金井キャンパス, 発表要旨集 43 ページ。
- 3) 山田真紀 (2016) 次期教育課程において特別活動をどう意義づけるのか, 日本特別活動学会第25回大会, 25周年記念南関東大会 (課題研究の部), 東京学芸大学小金井キャンパス, 発表要旨集 63 ページ。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

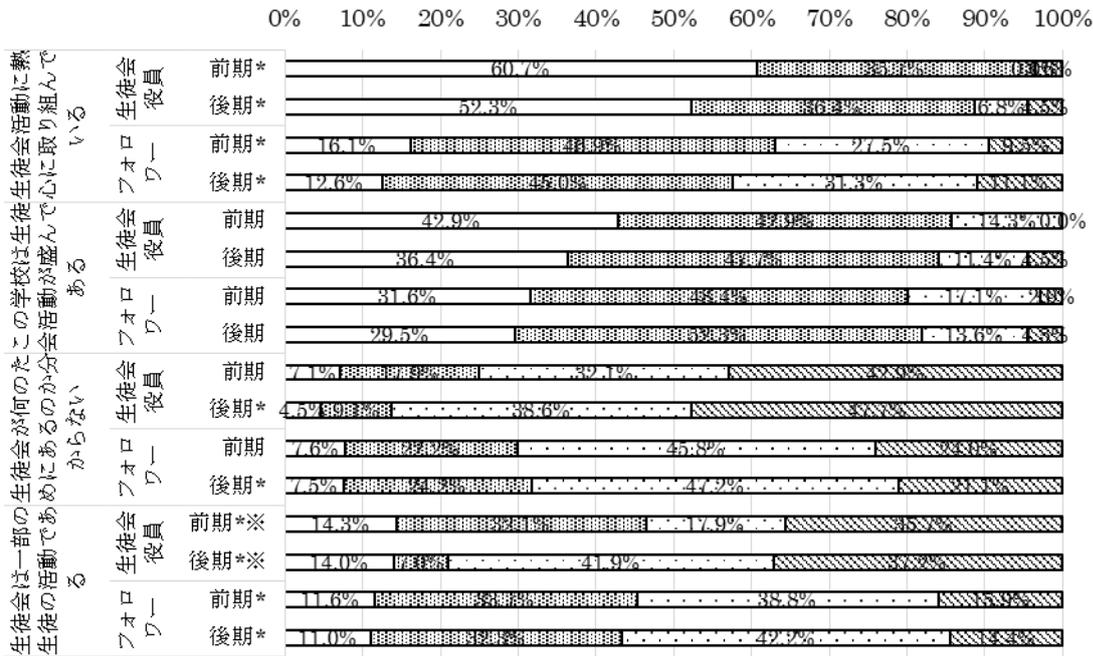
山田 真紀 (YAMADA, Maki)
椋山女学園大学・教育学部・教授
研究者番号: 30329643

資料1 ドキュメンテーションの例



資料2 質問紙調査の結果の例

図1 生徒会活動に対する意識と態度



□よくあてはまる ▨だいたいあてはまる □あまりあてはまらない ■あてはまらない

(注) *は生徒会役員経験者とフォロワー生徒との回答差に統計的な有意差が認められたもの。

※は前期調査と後期調査との回答差に統計的な有意差が認められたもの。